

2015年  
6月29日  
月曜日

平山 健二郎 教授 (金融論)

# 良き書との付き合い

私も若いときは入学式や卒業式などの儀式は嫌いでしたが、年齢とともに丸くなるというのか保守化するということなのかそういう儀式が好きになつてきまして、入学式などできるだけ出席するようにしています。それである入学式で学長先生が新入生の皆さんに「大学の四年間で、良き師、良き友、良き書と出会いなさい」と言われたことが強く印象に残っています。これはなかなかの名言と思います。

幸い私自身の大学生活では良き師、良き友、良き書に恵まれたと思っています。さて、今日は私が大学時代あるいは大学院時代に出会った「良き書」についてお話ししたいと思います。二冊あるのですが、どちらも山本七平という人の著作です。一冊目は『日本人とユダヤ人』という本で、いかにこれら二つの民族

が異なった考えを持っているかということが繰り返し書かれています。その中でとくに驚いたのが会議における票決の仕方の違いです。日本では全員一致の票決を好ましいと考えます。私が出席する教授会という会議でも投票する場合は採用人事などの最重要案件だけで、普段は学部長が務める議長が、「これでよろしいですね」と念を押すと、メンバーが頷いて承認するという全員一致の形をとって採決しています。

ところが著者の山本七平は「ユダヤの社会では全員一致の票決は採用しない。世の中に完璧な提案など存在しない。かならず何らかの弱点を持つているはずで、それに誰も気づかないのはおかしい。誰かがそれに気づくまでは全員一致は採決しない」という。「和を以て尊しとなす」とする日

本人は全員が同じ意見になることを理想とするが、ユダヤの社会ではそうではない、というのは「目から鱗が落ちる」思いがしました。たしかに、そういう見方もできる、ということに気づかされた本でした。世界には色々な考え方があつたのだと感心した次第です。

二冊目は『空気』の研究』という本です。最近でこそ「KY」空気読めない」のような表現がされますので、この「空気」の意味は悟って戴けると思いますが、本書が出た一九七七年ころはまだそういう用法は少なく、私も本書を読むまでは、何のこともサッパリ想像できませんでした。

さて、本書では昭和二十年四月の海軍第二艦隊の幕僚会議を採り上げます。沖繩では地上戦が始まつており、制海権制空権ともに米軍に取り返されています。そこへ戦艦大和を派遣

するか否かを幕僚会議で検討するわけですが、行けば撃沈されることは誰の目にも明らかである。しかも燃料は片道分しかない。しかるにそのときの会議には「これは派遣せざるを得ない空気」があつたということです。

皆、内心はおかしいと思いつつも、会議には空気というものがあつた、それに抗しきれない動きがあるというのです。日本人はつい他人に合わせしてしまいますが、ここぞというときにはやはり発言する勇氣を持つべきではないか、ということをお勧めしたと感じました。

私が山本七平氏から学んだことをどれだけ人生で活かせたかは自信がありませんが、これら二つの著作から学んだことを念頭に置きながら人生を歩んできた積もりです。皆さんも大学時代に「良き書」に出会われることを祈って止みません。■